

親鸞浄土教における人間と環境の洞察
—批判原理としての「浄土」の回復—

武蔵野大学 山崎龍明

(1) 人間が修道によって証悟しようとするときまず「煩惱」が障碍となる。

「煩惱」のなか「貧、瞋、痴、慢、疑、見」が根本煩惱とされ、「憍、誑、諂、忿、恨、嫉、覆、昏、沈、不信、無慚、無愧、散乱」等が随煩惱とされる。これらの心穢（煩惱）は人間に共通する根本的な迷いである。

現今、人間の限りなき傲慢の時代と言われる中であって、崩壊しつつある人間と理性を目のあたりにするとき、仏法の説く「慢」の思想は我々に鋭く問題を提起する。仏法の人間観は「(慢)過慢」「卑慢」「我慢」「増上慢」「邪慢」といった「慢」から脱却し、人間本来の人間に回帰する道を説くものであった。これは人間が「愚」に還る世界である。「煩惱」からの脱却には自力の仏道と他力の仏道といった二つがある。今ここでは他力の仏道といわれる親鸞浄土教が、高度に科学化し人工知能がいわゆる時代にどのような存在意義があるのか、といった視点より人間の考察を試みたい。

(2) 親鸞浄土教の根幹である「浄土」「往生」などと言うとそれだけで前近代、荒唐無稽なものと捨象されるであろうか。此土を超越した「アミダ如来」「浄土」は信を契機としてわれわれに内在する。「如来」と「衆生」、「浄土」と「穢土」は二元対立的に考えるのではなく、二而不二と言った論理のもとで領解されなくてはならない。親鸞は「生死即涅槃」「煩惱即菩提」といって「煩惱菩提体無二」と表現する。「煩惱」と菩提に関して「氷と水のごとくにて、さわりおおきに徳おおし」とも示している。これが大乘空の論理である。

親鸞の人間観は「煩惱具足」「罪惡深重」と規定されるが、同時にそれは「如来に等しい」「弥勒におなじ」人生を歩む者であるという、人間否定即肯定といったところにその特質がある。現代社会の苦逼を生きる人間を解放する道を説き示したものが親鸞浄土教の真髓である。この「即」を成立させる論理の根源に親鸞は「アミダ如来」「願力」(力願相符)のはたらきをみた。

(3) 次に「浄土」が此土の現実いかに寄与するかという問題を考えたい。仏法は依正二報を説く。いわゆる「環境」と「人間(個体)」ということである。「環境」と「人間」は切り離せない(依正不二)。人間は人間界という環境下にある。その場は娑婆とか穢土と言われる。その悪環境を脱して極楽浄土に転生するのが浄土教の基本型である。しかし、親鸞浄土教にあっては聊かその趣を異にする。浄土は往生する場(大槃涅槃)であるが、同時にそれは「此土」「我が身」を根源的に批判するものであった(人間再生の契機)。

浄土の構造である三嚴(仏国土、仏、菩薩)二十九種、とは「清浄功德、量功德、水功德、雨功德、光明功德、無諸難功德、一切所求満足功德」等々である。この莊嚴の一々に「仏もど何が故ぞ此の願を興したまえる」と曇鸞の『往生論註』には示されている。これらの国土、仏、菩薩の莊嚴(浄土)のありようを基底として、人間と現在の気候変動、いわゆる環境破壊等の根源について考察したい。「環境破壊」の主体、それは人間である。人間の自我意識、「煩惱」である。それ以外にはない。このことを浄土の莊嚴相は如実に示していると言えないだろうか。

キーワード。根本煩惱。親鸞浄土教の真髓。環境破壊と浄土の構造。